第18回国際心理生理学会議 (IOP2016) 参加報告

大阪大学大学院人間科学研究科

IOP事務局長

入戸野 宏

Report of the 18th World Congress of Psychophysiology (IOP2016)

Hiroshi NITTONO

Graduate School of Human Sciences, Osaka University

2016年8月31日から9月4日の5日間、キューバのハバナにおいて第18回国際心理生理学会議 (IOP2016) が開催されました。国際心理生理学機構 (International Organization of Psychophysiology: IOP) は2年に1度国際会議を開催しています。前回の第17回会議 (IOP2014) が広島で開催されたのは記憶に新しいことです。IOP2014に参加した海外研究者からは例外なく、記憶に残る素晴らしい大会であったとの賛辞をいただきました。尾崎久記大会長をはじめとする関係者の方々に、改めて御礼申し上げます。

さて、今回のハバナ大会は、前回とは対照的に、南国らしいおらかな学会となりました。旧市街から少し離れた、海辺に近いホテルで開催されました。基調講演5件、教育講演3件、会長講演1件、シンポジウム39件、口頭発表セッション6件、ポスター発表171件が行われました。40ヶ国から402名が参加し、活発な意見交換がなされました。アジアからの参加者は概して少なく、日本からは15名程度でした。

会議を主催したのは、Pedro Valdés-Sosa 教授 (キューバ神経科学センター) です。脳波やfMRIによるコネクティビティ解析の研究者として知られています。現在は、中国・成都市の電子科技大学にある神経情報研究所 (神経信息教育部重点实验室) でも教鞭をとっており、3か月ごとにキューバと中国を行き来

する生活だということです。双子の兄弟 Mitchell Valdés-Sosa 教授は、キューバ神経科学センターの所長をつとめています。キューバの研究は特に数理的な面で優れており、国際的な共同研究を数多く行っています。

Bruno Rossion 教授 (ベルギー) による基調講演は、高速で点滅する視覚刺激を見ているときの脳波を周波数解析することにより、顔の認知処理を検討できるという興味深い内容でした。定常状態視覚誘発電位 (steady-state visual evoked potentials: ssVEP) とは異なり、6 Hz 程度のやや遅いペースで提示することで、1次視覚野ではない皮質領域の活動を捉えることができ、fMRI や頭蓋内電極を用いた研究にも応用できるという話でした。また、Peter Lang 教授による感情に関するシンポジウムや、Milelie Besson 教授 (フランス) による音楽と神経科学についてのシンポジウムも興味深いものでした。アブストラクトは、学会誌 *International Journal of Psychophysiology* に掲載されています (Valdés-Sosa et al., 2016)。当初の基調講演者が2人参加できなくなるというトラブルもありましたが、概して成功した学術会議であったといえます。また、この分野の学会ではあまり出会うことのない、黒褐色の肌を持つ人々が多数参加していたのが印象的で、心理生理学の研究が世界中で行われていることを

2016.9.15 受稿, 2016.9.23 受理, 2017.3.1 J-STAGE 早期公開, doi: 10.5674/jjppp.1511rp

連絡者及び連絡先: 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-2 大阪大学大学院人間科学研究科 入戸野 宏

E-mail: nittono@hus.osaka-u.ac.jp

改めて認識しました。

キューバは複数の顔を持っています。スペインの植民地時代の街並みを残すとともに、社会主義国として、ホテルなどの高層建築は旧ソ連など東側諸国でよく見かける社会主義様式になっています。現在の主な産業は観光であり、国民と外国人旅行者は異なる通貨を使っています。何十年も昔の車がいまだに現役で走っていたり、購入できるモノの種類が圧倒的に少なかったりといった貧しい国ですが、教育と医療は完全に無料です。識字率はほぼ100%に達し、平均寿命は世界トップレベルにあります。アメリカとの国交正常化に向けた交渉が始まったのは2年前ですが、アメリカからの渡航はまだ容易ではないようです。今回の学会に参加するアメリカ人を乗せた飛行機が、ハバナのホセ・マルティ国際空港に到着した最初の民間チャーター機だったということです。

今回開催された理事会と総会において、日本生理心理学会がIOPの連携学会(affiliated society)として正式に認められました。他の連携学会には、オーストラリア、フランス、イタリア、トルコ、ギリシャ、マケドニアの関連学会があります。本学会の会員数はこれらの中でも最も多く、今後いっそうの活躍が期待されています。IOP会員の国別構成を見ても、日本はアメリカに次いで2番目です。連携学会の会員は、IOPの正会員になるための入会金(10ユーロ)が免除されます。IOPの会員になると、次回の会議参加費の割引が受けられるとともに、会員専用サイトを通じて、学会誌*International Journal of Psychophysiology*を無料でオンライン購読できます。詳しくは、IOPの公式サイト(<http://iopworld.org>)をご覧ください。

会議の直前に行われた選挙で、会長のGiuseppe Chiarenza(イタリア)と事務局長の私が再任されまし

た。長年副会長を務めたRisto Näätänenが退任し、新たにRobert Barry(オーストラリア)が選出されました。会計には、Emiliano Richardi(イタリア)が選出されました。任期は6年です。また、現在、学会誌の編集長を務めるMichael Larson(アメリカ)は38歳の新進気鋭の研究者です。現在は木村元洋先生(産総研)が編集委員を務めていますが、その的確な仕事ぶりから、日本からもう一人編集委員を推薦してほしいと依頼されています。興味がある方はぜひご連絡ください。

IOPは、英語圏以外の研究者でも、気兼ねなくシンポジウムの企画や口頭発表が行える、真に国際的な組織です。会員は31カ国に広がり、これからも増える予想されます。日本(東アジアで初めて)、キューバ(ラテンアメリカで初めて)と続いたIOPの国際会議ですが、今回の第19回大会(IOP2018)は、イタリアのルッカ(Lucca)で2018年9月4日—8日に開催されることが決まりました。ルッカは、IOP2012が開催されたピサに近く、中世の街並みが残った小さな町です。ピサまたはフィレンツェの空港から電車やタクシーでアクセスできます。IMT高等研究所(IMT School for Advanced Studies Lucca)が会場となります。新しい情報は、IOPの公式サイトに随時掲載される予定です。日本からの積極的な参加をお待ちしています。ポスター発表にかぎらず、シンポジウムの提案も歓迎します。

引用文献

- Valdés-Sosa, P., Bringas, M. L., & Martínez, E. (2016). Proceedings of the 18th World Congress of Psychophysiology (IOP2016). *International Journal of Psychophysiology*, **108**, 1-172.